

## キリスト教学の理念とその諸問題

京都大学

芦名定道

### (1) キリスト教学の理念

#### 1. 学問と学問の類型化

具体的な個々の学的営み（諸学科） → 類型 → 要素  
 自然科学と精神科学（説明と理解）  
 学問体系論

芦名定道『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社、1995年。

#### 2. 学・科学とは何か？

合理性とは？

#### 3. キリスト教学とは？

・『京都大学百年史／部局史編1』第2章より

([http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/retrieve/sr\\_bookview.cgi/BB00000052/Body/2\\_2\\_1.html](http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/retrieve/sr_bookview.cgi/BB00000052/Body/2_2_1.html))

波多野精一（1877～1950）が大正6（1917）年12月に宗教学講座に着任キリスト教の学術的研究のため寄付された渡辺荘奨学資金により、大正11（1922）年5月本講座が宗教学第2講座として設置され、波多野がこの講座を兼担することになった。波多野は、原始キリスト教、パウロおよびヨハネの宗教思想、宗教思想史等について講じ、退官後発表された『時と永遠』（1943年）のような、キリスト教の立場に基づく宗教哲学をも構想しつつあった。波多野の厳密なテキスト読解と深い宗教哲学的思索とが、本講座の礎石を据えたといつてよい。

波多野は、昭和2（1927）年、本講座の兼担を解かれて分担となったが、昭和12（1937）年3月には宗教学第1講座から本講座の担任者となり（第1講座を分担）、本講座は初めて専任教授を持つことになった。しかし同年7月に波多野は停年退官し、昭和23（1948）年まで講座担任者のいない状態が続くことになった。

この間、大正13（1924）年から講師を委嘱されていた山谷省吾と、昭和12（1937）年講師となった松村克己とが講座を護ることになった。山谷は新約学を講じ、『パウロの神学』（1936年）で昭和12（1937）年文学博士の学位を授与された。松村は理論的体系的見地からキリスト教の根本問題の究明に当たり、昭和17（1942）年には助教授に任じられた。その主著は、『根源的論理の探究』（1975年）である。しかし山谷講師は昭和21（1946）年に退職し、松村も同年占領政策に基づく休職を命じられ、やがて退職するに至った。

年間にわたって担任者を欠いていた本講座は、昭和23（1948）年、有賀鐵太郎（1899～1977）を教授に迎え、再建の道を歩むことになった。教父学を中心とするキリスト教思想史を専門とする有賀は、『オリゲネス研究』（1943年）で教父思想研究の立場を確立するとともに、ヘブライズムとヘレニズムとの歴史的交渉を究明し、キリスト教思想の根底にヘブライズムに発する独特の思想、ハヤトロギアがあることを解明した。『キリスト教思想における存在論の問題』（1969年）はその成果である。有賀の時代から教父学を専門とする学生が始め、本講座の1つの特徴となっている。また、本講座から専攻学生が出るようになったのも、有賀の時からである。それまでは、キリスト教学を学ぶ学生も区別なしに第1講座に所属していたからである。

- ・石原謙「序説 生涯と学業」（石原謙他『宗教と哲学の根本にあるもの』岩波書店、1954年、1-36頁）

#### 4. 波多野精一の宗教哲学 → キリスト教学

「宗教学も歴史的研究を出発点、基礎とせねばならぬ。然しながら宗教史は歴史として一定の価値を其成立の制約として予想する、しかし問題とはしない。宗教学は夫故宗教史を超越して進まねばならぬ、宗教史の前提とする価値内容、其普遍的妥当性の根拠を究めねばならぬ。宗教哲学は必要となつて来る。」（「宗教学」『岩波哲学大辞典』1922年）

「宗教哲学は飽くまでも宗教的体験の理論的回顧、その反省的自己理解でなければならぬ。」（『宗教哲学』序、1935年）

#### 5. キリスト教信仰の自己理解の理解（有賀鐵太郎、水垣渉）

神学：知解を求める信仰(fides quaerens intellectum)、信仰のラチオ(ratio)

信仰の内的反省運動

キリスト教学：神学のメタレベルでの反省

→ 方法論としての哲学・宗教哲学

#### 6. 武藤一雄

・神学と宗教哲学との間（武藤一雄『神学と宗教哲学との間』創文社）

「間」とは？

#### 7. 宗教研究としてのキリスト教学

（概論講義「キリスト教学への招待」、<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/jp/letters/index.htm>）

「キリスト教」という対象において結合された学の総体＝ネットワーク

キリスト教の諸現象の記述・分析（経験概念）

キリスト教諸現象がキリスト教である根拠・意味（本質概念）

キリスト教諸現象についての規範的議論（規範概念）

### （2）ティリッヒの組織神学

Paul Tillich, *Systematic Theology*. Vol.1, 2, 3 (1951, 1957, 1963),

The University of Chicago Press

#### 8. 組織神学の方法・構造

「相関の方法」(Method of Correlation)

問題解決の試み（探究）としての学・科学

如何なる問い（問いの定式化）を、如何なる方法で解決しようとするのか？

問いに対して、如何なる解決を与えるのか？

↓

「問いと答え」に規定された構造

共同の営みとしての学（科学者共同体）→ 問答・討論・対話

共同の営みの個人による集約 → 体系性

人間の探究する知は全体性を求める

問いの定式化と哲学（あるいは哲学的要素）

答えの提示と神学

「問いと答え」相関と「哲学と神学」相互性との交差とレベルの差異

9. 解釈学的循環と問いと答えの相関

「哲学と神学」相関の成立する場としての神学的循環

人間の知を限定し成立させるもの → 解釈学

絶対的知の断念あるいは先送り

媒介 (medium) としての経験

組織神学の源泉 (Sources)、規範 (Norm)、方法・合理性

源泉：諸科学全般（経験概念）、哲学（宗教哲学、本質概念）、

神学（神学体系、規範概念）

聖書そして伝統、融合する諸地平

10. 神学体系と規範

・規範（信条・伝統による多元性）による体系的統合

the liberation of finite man from death and error by the incarnation of immortal life  
and eternal truth

salvation from guilt and disruption by the actual and sacramental sacrifice of the

God-man

justification through faith

the picture of the "synoptic" Jesus, representing the personal and social ideal of  
human existence

the prophetic message of the Kingdom of God in the Old and New Testaments

the New Being in Jesus as the Christ

・神学体系の中心としてのキリスト論→神学規範の諸類型

11. 規範・伝統が希薄化するとき、組織神学はキリスト教学に接近する

現代キリスト教思想における組織神学の危機

=規範・伝統の危機

組織神学を成立させる規範の担い手は何か？

教派？ 個人？ 学派？

（3）組織神学とキリスト教学

12. キリスト教学では、規範性が括弧に入れられる。組織神学では規範性における神学的循環が構成される。

キリスト教学も組織神学も、同様の諸要素から成立するが、その形態化が異なる。

13. 「日本基督教学会」は、『日本の神学』という名称の学会誌を有している。

↓

「キリスト教学」というベクトルと「組織神学」というベクトルによって  
成立する。

「神学とキリスト教学との間」

この構造的に、次の要因がさらに交差する。

地域性（北海道、東北、関東、近畿、九州）と学的伝統という

二つの柱

14. 芦名定道「P. ティリッヒ 『組織神学』の方法と構造」

(<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub14F1.pdf>)

	Question	Answer
Vol.1 Introduction		
Part I	Reason	Revelation
Part II	Being	God
Vol.2 Part III	Existence	Christ
Vol.3 Part IV	Life	Spirit
Part V	History	Kingdom of God

- Being / Existence / Life • History
- God / Christ / Spirit : Trinity  
Creation / History / Eschaton • Eternity : History of Salvation